

市民と農民の回路

『常民とは・・・』

常民とは柳田国男のつくった言葉で山人とはちがって里人であり、里に定住して漂泊をしない・農業か漁業にしたがっている。祖先から子孫にわたる「家」の永続をねがい、その生命の連鎖と愛慕の交換を生きがりとする。文字を読む力がなくとも事の理を解し判断力に富む。文字によらずとも口づいたものを前代め文化を後代につたえ、そのことにより歴史をつくる。かれらは「官」に対する「民」であり、役人の政治に対しては距離を保ち、共同体に住んで自治を享受する。

(鶴見 俊輔)

- 市民と農民の回路を求めて --- 1.
- わが常民・民俗・歳時の記 --- 4.
- Kさん、お元気ですか? --- 5.
- 村役場と農協が直販を・・・!? --- 7.
- わたちのあと --- 9.
- 自己解体する共同体 --- 10.

74.9.30.

No. 20

収奪関係の可視化

齋藤 弥栄が冬期積雪地帯である

のために、これまで冬場の広島での直販活動は空白になっていたわけです。

それで、この冬は「仕入れによる宅配」という形で、来春に向けてやっ

ていこうとしているわけ

ですが、今日は、直販活

動がわれわれの運動にと

ってどのように位置づけ

られるのかを、話し合っ

てみたいと思います。

まず最初に、この直販活動によっ

て、今ある都市市民としての市民と

農民との関係が、それだけ変わり得

るのかというところ、問題にしたい

と思います。

大山 今ある市民と農民との関係

を、どんなものとして捉えているの
ですか。

齋藤 ぼくは、市民と農民という関

係は、単に消費者と生産者という言

葉では置きかえることのできないも

のだと考えています。ぼくの考える

農民というのは、「現在、農業をし

ている生産者」という意味の呼び名

ではなく、常に社会から収奪されて

きた歴史を背負ったものとしてある

のです。それに対して、市民の生活

は、その収奪によって成り立ってき

たのです。△消費者→生産者△とい

う図式では、両者が対等なもののみ

うに、関係が捉えられてしまってい
るように思います。

大山 ぼくは基本的に、市民と農

民という関係を、敵対的階級関係に

おいて捉えることには反対です。も

ちろんわれわれの「コミュニン運動は

階級闘争を目的としたものでもあり

ませんし。

理想から言えば、どんな社会

でも、工業従事者としての労働者、

農業生産者としての農民は

存在するのですから、それらが

対立の関係でない関係のもとに共存

するには、階級異同の視点からでは

なく、ランダムアー流に言えば、普

遍的概念としての「人類」「民衆」

という共通の軸ちゅうで捉えること
が必要ではないかと思ひます。
市民と農民の収奪関係として現象

してきている問題点のひとつは、今の資本主義社会においては、農民の労働が、都市労働者の労働と比して不当に安価である事が指通できると思えます。

齋藤 敵対的階級関係、階級闘争という方向に、われわれのコミュニオン運動があるのではないことは確かだと思います。ただ収奪関係というものは、徹底的に可視化されねばならないし、われわれの直販活動の課題としては、その収奪関係を市民の側からどう可視化することができるとかということだと思います。

大山 農作物の商品化を拒否したところをやつていくわれわれの直販活動は、まさにそのための運動ではないでしょうか。

— 交流から新しい集団へ —

齋藤 市民社会は、自分たちと違つた生活様式を持った他の集団、例えば、農民との関係を殆んど意識しないという非常に閉鎖的、自己中心的な集団だと思えます。だから、農民なら農民という他の集団の生活意識を、市民の生活意識とぶつかり合わせることによって、市民が自らの閉鎖性に気付き、それを突き破る契機を創り出せるのではないかと考えています。

大山 市民社会のイデオロギ、あるいは自己中心的世界観が、資本主義という経済体制によつて守られているところに問題があると思うのです。だから、われわれは、もっともつと農業生産者としての自覚を明確にしていき、その姿勢を市民社会に

ぶつけていくことが必要だと思えます。

齋藤 資本主義社会の経済体制によつて分断されているへ作る一手に入れる一使うという流れ、つまりへ生産一流通一消費を、そこに直接かかわるものでひとつの集団として明確に意識できる関係にしていくということですね。

大山 そうしていくために、今後どのようなことが必要なのでしょう。

— 冬期の活動に向けて —

齋藤 今考えられることは、まず農作物を供給するものとして、直販（宅配）の回数と、今の週一回から二回に増やして、都市生活者の台所を完全にまかない切れるようにすることが必要だと思えます。もちろん

われわれの野菜でそれができると
が理想なのですが、まだまだそれだ
けの力はないので、今回の仕入れ配
配という形は、先ほど述べた集団づ
くりという点から、おもしろいので
はないでしょうか。

次に、集団の質という点で、都市
生活者と農民との、生活や意見の交
流が、野菜を越えたところでできる
ような共通の新聞なども考えてみた
いと思います。現在の直販ニュース
は、われわれの手で作られているた
めに、農業生産者としての立場はあ
っても、最初に言ったような、農民
としての内容がないと考えています。
理想的な形としては、都市の住民
組織と、農村の部落自治会のような
ものが、直接的に交流するような形
になっていくことが望ましいと思ひ

ます。

〔7/13~9/20〕ユニオン委員会会計報告です

定期カンパ (栗口、園子、有森、神山、K)	6000.-	印刷紙代	4500.-
普通カンパ (平田)	1000.-	原紙修正液	250.-
定期購読料 (羽原、村松、大畑、服部、細、白川、 前田、有森、神山、藤原、梶、金沢、沢田)	8600.-	通信切手代	2000.-
パンフ売上げ	1230.-	鶏のヒナ 250羽	45000.-
前回からのくり越し金	99479.-		
収入合計	116309.-	支出合計	51750.-

残金は 64559.- なのです。

しかし、なぜか借金は、100余万円 (弥栄50万、広島25万、大阪30万) あります。でも皆んなそれぞれ持ち場で頑張っていると思いますよ。カンパのみで、弥栄之共同体に、鶏のヒナ(ホシノクワス 1羽180円を250羽)を買いました。皆んなの力が、あっちこっちで実を結ぶように思います。

〔7/13~9/20〕土地共有券運動報告です

Matsuba-Mose (1口)、米田(1口)の名氏	小計 2口	4000.-
	今年合計 17口	34000.-
	今年目標 150口	300000.-

来年は本当に1ka^{79-ル} 買いたいのですが、担当者としてもサボッテるので、弥栄の人達に、又運動して下さる人にも申し訳ないと思ひます。共有券運動用ビラも作りたいと思ひます。

担当 コモウ

大森良俗歳時記

2. 石見地方の芋代官

石見の国大森には、幕府直轄の石見銀山があった。この銀山は、中世から近世にかけて最も栄えたが、これはその頃の話である。

享保年間（一七二六～三四）には、たびたびの飢饉が起ったが、その時この大森の地で貧民を救った人に井戸平左衛門がいる。

大森は天領であったため、各藩より特別なあつかいをうけ、藩权力の介入をも許さないうちであった。飢饉で米ができない時でも、領外から勝手に米を入れることはできなかつたし、幕府の許可なしに倉庫から米を出すこともできなかつた。

ところが井戸平

左衛門は、この法令を無視し、飢饉で苦しむ人々に、

倉をあげて幕府貯蔵米を分け与えたりした。そのため、許可なしに倉をあげたとして、井戸平左衛門は代官をやめさせられてしまったのである。その後、任地で自殺したとか病死したとか伝えられている。

× × ×

井戸平左衛門は、凶作や飢饉の惨状をみるたびに、なんとか人々の生活の安定をはかる方法はないものかと頭を悩ましていた。

九州を旅行したとき、修業僧から薩摩寺の話き聞いた彼は、許可を得ずにそれを持ち帰って、石見海岸部の砂地をもつ村々に植え付けさせた。

その結果、年貢の対象とならない

薩摩芋作りは、田畑が少なく土地が肥えていまい石見地方の人々に、かけがえのない食糧を供給することになった。

× × ×

このよつにして飢饉を救った恩人として、石見地方一帯には、井戸平左衛門をまつた石塔があちこちにかけられるという。ここ横谷部落では、集会所から小黒目（屋号）宅へいく途中にある石塔がそれである。

（五十歳 常井）





があつてなかなかうまくいかす
じまいでした。

たとえば、耕うん機や草刈り
機があいついで故障し、農作業
は大幅におくれ、それに拍車を
かけるような今年の長雨。広大
なジャガイモ畑をエツチラオツチラ
皆汗だくで鋤をふるいました。

今年耕した畑は、春のキャンプで
用立てした畑を入れると一町くらい。

田植えは八反くらいやりました。そ
う言えばもうすぐ稲刈りの季節へ突
入です。Aさんが植えた苗も大きく
成長して穂をつけていますよ。去年
の春に植菌したシイタケも現在大豊
作です。

とは言え、今年もやっぱり出稼ぎ
を免れ得なかつた弥栄農業。まだま
だ修業が足りませんでした。反省す

おそい雪どけの日を待ちわびたこ

ろからすでに半年。弥栄はもう秋で
す。朝晩はとても冷えこみ、セータ
ーを着込んでまだまだ寒いくらい。

さて、今年に入ってから実にいろ
んなことがありましたが、今回は農
業生産・直販・養鶏について、それ
ぞれ簡単に報告しておこうかと思ひ
ます。

再出発です——農業

年頭の正月キャンプで作成した今
年前半の作付計画は、いろいろな障害

べき点をかきえあければきりがな
いのですが、それらの上になつて、こ
の秋からは次のような方針で農業生
産をやっていきたいと考えています。

- ① 弥栄の土地にあった生産性の
高い作物で、単品でも直販でき
るものをつくっていく。
- ② 消費者ともっと密接につなが
っていくために、つまり宅配へ
向けて、最初は小面積の畑
でも、管理をいきとどかせ、品
質のよい信用のおける野菜を
つくっていく。

そして何よりも私たちの生産者として
の立場をもう一度とらえかえす
ところから再出発しようと思ひます。

じゅぶりと二歩二歩……直販

さて次は直販です。

今年才一回の広島直販もまだ始まらない五月の初め、ひょっこり弥栄を訪れた浜田に住む柴田さん徳永さんのカッフル。いろいろ話す中で、浜田での直販は急に具体化し、五月一九日に開始、その後毎週続けられています。

広島のほかでも新しい直販地が次々と増え、現任おもに五ヶ所で青空市場をひらいています。

六月中旬頃から、日曜日には浜田で、月曜日には広島で直販という形が確立し、出荷や情宣体制もそれに合わせて一週間でここに組んでいます。特に六月十日から七月十日までの一ヶ月を情宣特別強化月間とし、ぐらつきかけていた直販の立て直しをはかりました。

消費者ひとりひとりの個別契約

販売方式である宅配は六月から開始しました。私たちはこの宅配を私たちの直販運動のひとつのキーポイントとしてとらえています。そして今後、その質的な深まり、広がりを中心に模索していこうとしています。

さて部落のほうでは、Kさんが弥栄を訪れたころにはまだ横谷と隣りの小角だけでしたが、最近バス停のある長安や、さらに浜田へ出る途中にある上野坂からも、私たちの共同体直販へ出荷があります。特に上野坂では、五軒の農家が品質のよい野菜を共同出荷しています。

ニワトリはストライキ?

最後に、ニワトリのことに少し触れておこうかと思えます。

御存知のように、これまで約百五

十羽の採卵鶏を飼い、たまごは近くの農家へ、鶏かんは良質の肥料として自分たちの畑へ入れてきました。ところが、この春以降どういわけかほとんど産卵率がさがり、飼料代もとれないほどのありさま。そこで、メンバーが栃木県今市市にある日光協同農園へ二週間ほど養鶏の勉強に行くなど、現在その打直しに努めています。

十月二日には新しくヒナが二百五十羽はいることになっているんです。かわいいうヒヨコが病気になるたり死したりしないよう祈っていて下さいね。

では、Kさんと再び弥栄で会える日を楽しみにしています。おたよりください。

(編者 林田)